

山梨県立文学館 館報

1989(平成元年)年
11月 創刊

第100号



北文学の起源	2
企画展「北杜夫展 ユーモアがあるのは人間だけです」	3
人間だけです」展示資料より	3
閲覧室より・寄贈資料より	4

教育普及事業より・館からのご案内	5
資料翻刻 堀口大樹	6・7
長谷川巳之吉宛書簡	6・7
館の日誌・利用のご案内	8

企画展

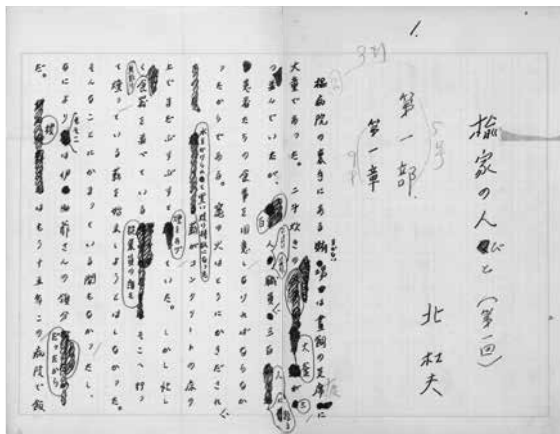
「北杜夫展 ユーモアがあるのは人間だけです」開催

平成二十八年九月十七日(土)～十一月二十三日(水・祝)

北杜夫(一九二七～二〇一一)は、齋藤茂吉の次男として生まれ、旧制松本高校、東北大学医学部を卒業。精神科医を務めながら、同人誌「文藝首都」を拠点に「幽霊」等の小説を発表した。一九六〇(昭和三十五)年「夜と霧の隅で」で芥川賞を受賞。続いて、一九六四年に齋藤家三代をモデルに執筆された長篇小説『楡家の人びと』を刊行し、高い評価を得た。一方で、一九六〇年の『どくとるマンボウ航海記』をはじめとする「どくとるマンボウ」シリーズや「さびしい王様」に代表されるユーモア作品を数多く執筆して人気を博す。

本展では、二十代から三十代にかけて同人誌に発表した作品も取り上げ、小説家としての軌跡を辿ると同時に、若き日の作歌や未発表の短歌も取り上げ、歌人としての側面にも光を当てる。さらに、家族や友人を巻き込み創設した「マブゼ共和国」や、熱狂的な阪神タイガースファンとしての一面など、バラエティに富んだ資料により人間的な魅力も紹介する。北は、一九五五年十二月から一年間、

慶應義塾大学医学部神経科から派遣され山梨県立精神病院(現・山梨県立北病院)に勤務している。その当時の様子は『どくとるマンボウ医局記』や友人・辻邦生との往復書簡などで知ることができ、幅広い才能によって多くの読者を魅了し、現代文学に大きな足跡を残した北杜夫の生涯と文学とを紹介する。



北杜夫「楡家の人びと」原稿 世田谷文学館蔵

■企画展関連イベント ※講演会・トーク・講座は参加無料。当館受付、お電話またはホームページよりお申し込みください。

- 講演会「どくとるマンボウ家のでんやわんや」
10月1日(土)午後1時30分～3時
講師 齋藤由香(エッセイスト・北杜夫長女)
会場 講堂 定員500名
- 講演会「北杜夫とどくとるマンボウ、二人で一人」
10月30日(日)午後1時30分～3時
講師 石原千秋(早稲田大学教授)
会場 研修室 定員150名
- トーク「北杜夫は3人いました」
喜美子夫人が語る波乱の50年」
11月3日(木・祝)午後1時30分～3時
語り手 齋藤喜美子(北杜夫夫人)
聞き手 三枝昂之(当館館長)
会場 講堂 定員500名
- 講座「これは必見!展示資料から」
9月25日(日)午後1時30分～2時40分
講師 保坂雅子(当館学芸課長)
会場 研修室 定員150名
- 閲覧室資料紹介「マンボウ先生の作品たち―北杜夫の世界―」
9月16日(金)～11月23日(水・祝)
入場無料

文学創作教室

成島出講演会「映画と文学」

五月二十九日(日)に、本県出身で映画監督の成島出氏を講師に迎え、映画作りなどについての話を伺った。聞き手は当館職員の梶原宣仁教育主事。映画「ソロモンの偽証」の撮影では、「いじめ」を取り上げた内容のため、学校からの協力を得るのが難しかったのだが、大月市内の廃校で撮影できたこと、母校・甲府東高校の生徒もエキストラで出演してくれたことなどのエピソードを紹介し、ふるさとへの感謝の思いが語られた。数々の映画製作の裏話を語り、世代を超えて見てもらえるような映画をこれから作っていきたくと話した。

なお、高校生創作教室に位置づけたこの講演会には高校生37名が参加。監督に質問を向ける生徒もいた。



右：成島出監督

北文学の起源

新部公亮

北杜夫さんの生涯の友人は、多感な青年時代に松本高校で出会った辻邦生さんであった。『どくとるマンボウ青春記』にあるように、入学したのは辻さんが一年早かったが、卒業したのは北さんの方が一年早かった。二人は同じ思誠寮西寮で寝起きを共にしていた。ダベリコンパなどでじつくりと文学や青春、人生について語り合った交友関係は、その後五〇年間、辻さんが没するまで親密に続く。往復書簡集『若き日の友情』では、二人がお互いに励まし合い、批評し合い、共に文学の道に進んで行く過程が信頼という思いの基に書き描かれている。読み手には、文面から滲み出る友情が、羨ましいほどに煌いて見えてくる。

その辻さんが、北杜夫という人物について次のように語ったことがある。

「宗吉が昆虫について話すのを聞いて

いると、そこに籠っている何とも表現しようなない深い感情に、嫉妬を覚えずにはいられなくなる。虫の話が聞かされるたびに、自分には宗吉の虫にあたるものがないと思え、そこでまた嫉妬してしまう——」

北さんの心の神話の原風景が、青山脳病院の隣に広がっていた原っぱであり、そこに飛び交う虫たちであったことを、辻さんはダベリの中に見出していたのだ。

北文学に多大な影響を与えた小説家は、辻さんや恩師・望月市恵先生から勧められたトーマス・マンであると良く云われる。杜夫というペンネームは、愛読書『トニオ・クレール』のトニオに杜二夫を充てたものであることも有名な話だ。そのマンの親友に、同じ時代を生き抜き、反戦を共に叫び続けたヘルマン・

ヘッセがいる。ふたりの間には北十辻さん同様、往復書簡集が出版されている。

ヘッセは水彩画を良く描くとともに、蝶や蛾をこよなく愛する虫屋でもあった。蝶を賛美する多くの詩歌や短編を書いたが、中でも有名なのが中学国語の教科書に七〇年間も教材として掲載され続けている『少年の日の思い出』である。この珠玉の短編のお蔭で、日本におけるヘッセ受容が高まったのは言うまでもなく、北さんもトークショーの度に引き合いに出席していた。そんなヘッセと、彼の五〇年後に生まれた北さんには奇妙な共通点がある。二人とも大の虫好きであったこと、(躁)鬱病であったこと、絵を描いていたこと、マンや辻さんのように生涯の友人がいたこと、自分の生い立ちや体験を巧みに小説に仕立てていたこと。そしてヘッセが『少年の日の思い出』の原典『クジャクヤママユ』を書いた年齢と、北さんが『どくとるマンボウ昆虫記』を週刊公論に連載していた年齢は同じ三四歳なのである。

辻さんは盟友・斎藤宗吉に、ヘッセの盟友・トーマス・マンを紹介はしたが、北文学の根源は、厳格な父親・斎藤茂吉にあると言っている。茂吉を文人としても敬愛していた北さんは、「私の作品など(但し『楡家の人びと』だけは除く)、こ

の世からすべて消えてしまってもいいから、茂吉の歌だけはずっと読み継がれて欲しい」と言っていた。「私の小説など、茂吉の一首にも及ばない」とも。

三島由紀夫からも褒められた情景描写の名手・北杜夫は、父親譲りの類い稀な観察眼を持っていた。写生道をモットーとするアララギ派の大歌人・斎藤茂吉が、生涯に残した短歌は約一七五〇首。そのうち五六〇首ほどに虫の名前が詠み込まれている。実際の和名で登場する昆虫もすこぶる多く、その種名の殆どは息子の宗吉から教えてもらったものだと思える。『マンボウ青春記』の中に、茂吉と山形県大石田町に疎開していた折、町内の愛宕神社境内で、じつと瞑目したまま申吟していた茂吉の記述がある。このとき北さんは「狩猟蜂が獲物の蜘蛛を引きずってきて、地面に穴を掘り、獲物を埋めてゆくさまを一時間近くも見守っていた」そうだが、茂吉の歌(大正九年)にもこれと同じ内容のものがある。

わがまへの砂を掘りつつ

蜘蛛はこぶ蜂のおこない

みらくしかなし

茂吉は、蜂を観察する自分の息子を、じつと観察していたに違いない。

(にいべこうすけ

栃木県庁職員・日本昆虫協合理事)

企画展

「北杜夫展 ユーモアがあるのは人間だけです」
展示資料より

① 齋藤宗吉「読書録2」ノート 個人蔵



北杜夫(本名齋藤宗吉)が、松本高等学校在学中の一九四六(昭和二十一年)十二月二十三日から書き始められた読書録。古泉千樫の『川のほとり』からは、収録の九首が書き抜かれている他、高村光太郎『智恵子抄』『萩原朔太郎全集』、ストリンダベルク(小宮豊隆訳)『幽霊曲』、イブセン(竹山道雄訳)『民衆の敵』では作品の一節や登場人物を記し、感想を書き添えている。『どくとるマンボウ青春記』(一九六八年三月中央公論社)には、高校入学後、友人や先輩に比べて、自分が本を読んでいること

に気付き、内外を問わず「闇雲に読みはじめた」と記されている。

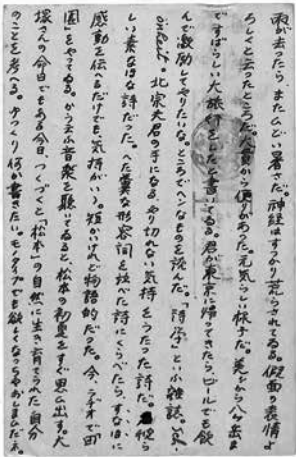
ノートは途中から、自作の詩が書かれ、それまでの横書きから縦書きに変わっている。多くに推敲の跡が見られ、創作に苦心する様子が窺える。これらの詩は、東北大学医学部入学以降に書かれたもので、「うすあをい岩かげ」や「絶縁状」など、後に「文学集団」や「詩学」に発表された作品が含まれている。ノートの後半約三分の一には、父である齋藤茂吉の歌集『赤光』収録の短歌が書き写されている。

② 辻邦生 齋藤宗吉宛葉書

一九五〇(昭和二十五)年九月八日

個人蔵

辻邦生(一九二五〜一九九九)は、一九四四(昭和十九)年に松本高等学校理科乙類に入学したが落第したため、翌年



入学した北と寮で出会い親交を結んだ。

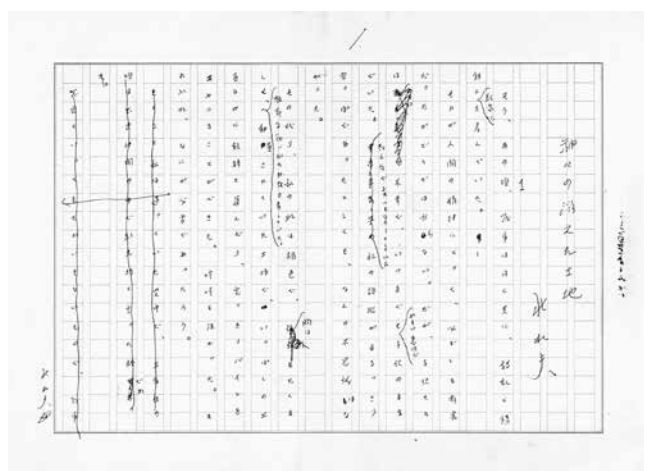
この葉書は、辻が東京大学文学部、北が東北大学医学部在籍中に書かれ、夏季休暇を父茂吉と過ごす箱根の別荘宛に送られた。「北宗夫」の筆名で「詩学」第五巻第三号(一九五〇年四月)に発表された詩「Schönheit」について、「へた糞な形容詞を並べた詩にくらべたら、すなほに感動を伝えるだけでも、気持がいゝ。短かいけれど物語のだった」と感想を述べている。「Schönheit」は、①の「読書録」ノートに見られ、「1949.VIII 又一作」の記述により、一九四九年八月九日に作られたことがわかる。

『若き日の友情―辻邦生・北杜夫往復書簡』(二〇一二年十一月新潮文庫)未収録。

③ 北杜夫「神々の消えた土地」原稿

世田谷文学館蔵

「新潮」第八十九巻第六号(一九九二年六月)に掲載。同年九月に刊行された単行本(新潮社)の「あとがき」に、本作は「大学二年二十三歳のとき、創作ノートに半分書いておいたもので、それほど捨てたものでないように思われたので」、後半を書き継いだとある。



「ダフニス」、「クロエー」と呼び合う則雄と知子は、美ヶ原で結ばれたが、終盤、知子は疎開先の甲府で空襲に遭う。疎開先の住所「太田町」は北が勤務した病院があった里吉町に近い。甲府空襲については、甲府から東京へ戻った一年後、病院の看護婦一同からの葉書に、北からの問い合わせに答える形で空襲の日時とB29の機数が記されており、当時から作品の素材として関心を持っていた可能性が考えられる。

(学芸課 保坂雅子)

閲覧室より

笠井彦乃という人

恋多き画家として知られる竹久夢二であるが、彼の人生や作品に大きな影響を与えた女性として、また、夢二が生涯愛し続けた最愛の人として知られるのが笠井彦乃である。

このほど刊行された『夢二を変えた女 笠井彦乃』(坂野富美代著 論創社)には、十八歳で夢二と出会い、父の反対を押し切って一途な愛を貫き、画家として自立する夢を抱きながら二十三歳九月で生涯を閉じた彦乃の姿が、残された日記・書簡等の資料や関係者のことばとともに紹介されている。

彦乃は、明治二十九年三月二十九日、山梨県南巨摩郡中富町(現身延町)西嶋に生まれた。父宗重は、明治三十六年、単身上京し、日本橋本銀町に紙問屋、芙蓉社笠井商店を開業した。商売熱心で同業者からも一目置かれ、宮内省御用達商となつて家業は順調であつた。

彦乃は、西嶋尋常小学校卒業後上京し、日本女子大学附属高等女学校に入学した。幼い頃から絵を描くことが好きだつた彦乃は、在学中から日本画家・池上秀敏について日本画を学んでいる。

ふたりの出会いは、大正三年、彦乃が十八歳、夢二が三十歳の時であつた。そ

の頃、夢二は日本橋に港屋絵草紙店を開店し、夢二デザイン千代紙、便箋・封筒、帯、浴衣など、夢二ファンが喜びそうな品々が店頭並び、人気を博していた。彦乃は、夢二に会いたいため港屋に足繁く通い、絵の指導を願ひ出た。夢二は、彦乃の才能を見抜き女子美術学校への入学を勧めた。

港屋で出会つたのをきっかけにお互いに惹かれるようになるが、夢二は当時、協議離婚した岸たまきと別居と同居を繰り返す子どもまでいた。一方、彦乃も渡米中の許嫁がいたのだが、ふたりの恋はいくつもの困難を乗り越えて、やがて結ばれ、短いながらも幸せな日々を迎えることになる。

彦乃は絵の修業を口実に父を説得し、京都に出て、父には黙つて夢二と暮らすようになった。京都で過ごした大正六年六月から一年余りのこの時期が二人にとってはかけがえのない日々であつた。この頃、夢二と夢二の幼い次男不二彦とともに北陸の温泉や金沢を訪れ、なかでも、湯涌温泉の山下旅館で過ごした三週間あまりは、彦乃には心安らかで満ち足りたひとときであつたに違いない。

しかし、幸せな時は長くは続かず、大正七年旅行中に当時不治の病とされた結核にかかり、その後父によつて東京へ連れ戻され、順天堂病院に入院。回復することなく、大正九年一月十六日、二十

三歳で亡くなつた。

夢二の彦乃への思いは、大正八年二月に発行された『山へよする』に凝縮されている。ふたりの出会い、恋の喜びと苦悩、旅先での思い出、彦乃の入院など、共に過ごした日々を短歌で綴り、挿絵が描かれ、思い出の場面が再現されている。鮮やかな色彩と曲線で描かれたカバーは、彦乃の体をデザインしたものである。病床でこの本を手にした彦乃は、どんな思いだつたのだろう。

なつかしき娘とばかり思ひしをいつか哀しき戀人となる
伏せし眼の睫毛のひまのつぶら眼の露ふかきほどの言の葉もがも
指折りて別るゝ日をば数ふなりいぢらしき子よ逢ひしばかりに
汝が生れし甲斐はも哀し瑠璃色の葡萄の眼より涙こぼるる
湯涌なる山ふところの小春日に眼閉ぢ死なむときみのいふなり
「春は来ぬ今年は誰と羽根追はむ」細りし指を数へつゝいふ

『夢二を変えた女 笠井彦乃』(論創社 二〇一六年)、『山へよする』(初版本複製 竹久夢二全集二十 ほんぷ出版 一九八五年)は当館閲覧室で読むことができる。その他、『夢二日記』『夢二書簡』等の関連資料も所蔵している。

(資料情報課 飯沼典子)

「寄贈資料より」

(平成二十八年五〜七月)

- 三浦仁氏より中田信子書簡二点、図書一点。
- 一條宣好氏より「南方熊楠と『甲斐昔話集』抜き刷りほか雑誌一点。
- 野澤俊之氏より野澤一童子が見た…色紙ほか図書三二点。
- 村松定史氏より佐藤春夫「杏さく…」軸装など特殊資料五九点、図書三七点、雑誌二点。
- 八木正子氏より「本と旅する」新聞切り抜きなど二点、視聴資料四点。
- 小谷瑛輔氏より「切実か、不真面目か」抜き刷りなど二点。
- 三枝昂之館長より岡井隆「伊太利抄」扇子ほか図書一点。

次の皆様からも図書・雑誌等を御寄贈いただきました。(敬称略)

相澤 啓三	手塚 敦史
阿木津 英	中田 水光
雨宮 更聞	中村 章彦
石崎 等	中村 吾郎
伊丹 啓子	奈良 文夫
稲垣 信子	南部 敏明
内田 諄子	秦 恒平
岡井 隆	花輪 兵庫
如月 のら	濱島 広大
橘田 活子	平松 伴子
木村 和夫	備仲 臣道
齊藤 繁	古屋 清
葛木 雅清	水木 亮
堤 信彦	三宅 風門
角田 直人	安水 稔和

この他に団体の方々からも御寄贈いただいております。

教育普及事業より

朗読公演会

7月16日(土)に、劇団黒テントによる公演「物語る演劇 山崎方代」を開催した。甲府市右左口出身の歌人、山崎方代の半生を描いた田澤拓也『無用の達人 山崎方代』を原作としている。方代と、それを取り巻く四名の人物によって語られていく物語。劇中では、方代作の短歌が詠まれるだけでなく、昭和の流行歌が演者たちによって歌われ、見る者が方代の人生を知るとともに、方代が生きた時代を追体験できる内容となっていた。



夏休みワークショップ実施報告

7月27日(水)、観世流能楽師、佐久間

二郎氏を講師に迎え、「大人も楽しい伝統芸能」能の世界を体験しよう」を開催。面をつけたり、基本の姿勢やすり足など、身体を動かしながら能の基本に親しんだ。

7月31日(日)には、「銀河鉄道の写真立てを作ろう」と題してペーパーキリリングのワークショップを開催。宮沢賢治「銀河鉄道の夜」をモチーフに写真立てを飾った。

8月7日(日)には「やまなしの森の飛び出す絵本を作ろう」を行った。蟹の親子を始めとする賢治童話に登場するアイテムを使ってミニしかけ絵本を製作した。

館からのご案内

教育普及事業

○移動文学館

学校向けに行っている文学館資料貸出事業に新たなセットが加わりました。宮沢賢治の作品世界をイメージしたもので、「賢治のカラパネル三枚」「銀河鉄道の天文写真(写真提供・牟田淳氏)」「イーハトーブの木の模型」で構成されています。木の模型は、山梨県在住の木工作家・ニヤームルクロツペ向井野々花さんが製作しました。

貸出の際に出前授業を行うことも可能です。ぜひご利用ください。

○新春ワークショップ百人一首教室

平成29年1月8日(日)

講師 清水章子(竜王カルタ会)

会場 芸術の森公園内茶室素心菴



移動文学館「イーハトーブの木の模型」

定員25組 無料

※要申込。電話または当館受付にてお申し込みください。(11月頃より受付開始予定)

○名作映画鑑賞会

- ・ 9月18日(日)「残菊物語」
 - ・ 10月16日(日)「道く白磁の人」
 - ・ 11月20日(日)「彼岸花」
- いずれも午後1時30分
会場 講堂 定員500名
※申込不要、入場無料

展示室

○常設展第一～四室

樋口一葉、芥川龍之介、飯田蛇笏など山梨県出身・ゆかりの作家を紹介する各コーナーの展示替えとともに、第一室で

期間限定の資料展示を以下のとおり行います。

- ・ 秋の常設展「武田泰淳と富士」
- ・ 8月30日(火)～12月4日(日)
- ・ 冬の常設展「米澤順子」
- ・ 12月6日(火)～3月20日(月・祝)

○常設展第五室

山梨出身・ゆかりの文学者104名を二期に分けて展示。

- ・ 10月1日(土)からは、詩・短歌・俳句・川柳・漢詩のジャンルを展示します。第五室は、8月30日(火)～9月30日(金)、11月25日(金)、3月14日(火)～3月31日(金)は休室します。

○新収蔵品展

1月21日(土)～3月20日(月・祝)平成28年に新たに収蔵した文学資料を展示します。入場無料。

閲覧室「入場無料」

○閲覧室資料紹介

- ・ 「芥川賞・直木賞の小説を味わう」
- ・ 2月10日(金)～4月9日(日)
- 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介
- ・ 「辻邦生」(9月24日生まれ)
- ・ 9月9日(金)～9月28日(水)
- ・ 「石原八束」(11月20日生まれ)
- ・ 11月16日(水)～12月8日(木)
- ・ 「檀一雄」(2月3日生まれ)
- ・ 1月27日(金)～2月8日(水)

○書庫見学

11月20日(日) 県民の日
午前11時/午後2時の2回

資料翻刻

当館が購入した堀口大學の長谷川巳之吉宛書簡四通を翻刻する。

長谷川巳之吉(一八九三〜一九七三 新潟県生まれ 劇作家・詩人・出版人)は、一九二三(大正十二)年に第一書房を創業し、松岡謙『法城を護る人々』をはじめ、堀口大學(一八九二〜一九八一 詩人・翻訳家・仏文学者)の『月下の一群』(一九二五年)や、上田敏、萩原朔太郎などの豪華版詩集を刊行し、雑誌「セルパン」を発行した。

堀口大學 長谷川巳之吉宛書簡

一九四四(昭和十九)年(推定)四月二十二日

東京空襲は近く必ずあると小生は信じてゐる。

それも決して一度や二度ではなく何度となく、それもおそろしく大規模のやつが。

税金十六七万円もとられたのでは大変だね。

あとに何が残る。何かしても民は税に亡び、何もしなくとも民は税に亡ぶ。してもしなくても亡ぶるは一なり。とんだ時世になつたものだ。

それにしても箱根の五月は美しい。あれは小生の知る限り最も美しい地上の五月だ。あの若みどりみなぎる中であつて正月以来失はれたエネルギーをとりかへしたまへ。そして次なる活動へ。

詩人見者よ、先づ体力を貯へよ。君を以つてすれば、為すべき事は何時だつて世にはある。今夏も是非勝山のホテルへ行き給へ。あれほど君の心身に適したところはまたと他にはなささうだ。興津の尼寺は暑すぎて困ると思ふ。エネルギーを養ふこと

にはならぬと思ふ。小生の浅川ゆきは今夏はあきらめてゐる。時々勝山へ遊ばせて貰ひます。花は散つて、まだ寒い。山中はましてひとさわ、風なぞ召すな。

四月廿二日

堀口生

長谷川大兄

〈受〉 神奈川県箱根宮之下

富士屋ホテル

長谷川巳之吉様

〈発〉 四月廿二日

静岡県興津八一六

堀口大學

〈註〉縦一七×横三八、六センチメートルの用紙一枚に墨書。封筒は、差出人住所・氏名が朱印、五銭切手一枚貼付、消印は場所、年月不明で、「□□・22」。

「勝山のホテル」は、山梨県の富士河口湖町勝山にある富士ビューホテル。「浅川」は富士河口湖町浅川、「山中」は山中湖畔、もしくは旧山中村を指すか。

大學は一九三五(昭和十)年に浅川に避暑に訪れ、以後一九四三年までの毎夏、滞在した。一九四三(昭和十八)年七月には、大學、巳之吉の滞在する河口湖畔の富士ビューホテルに、詩人の田中冬二が訪ねている。このことから、本書簡を一九四四年のものとして推定した。

この年二月、巳之吉は第一書房を廃業した。

堀口大學 長谷川巳之吉宛書簡

一九四四(昭和十九)年九月二十七日

拝呈

今朝は富士に初雪、秋も次第に更けゆくことです。その後御機嫌如何?

芝さんからバタはまゐりましたか? まだのやうでしたら、そして困難のやうでしたら、岩子から送らせますからおつしやつて下さい。昨今のこの涼気では途中解る心配もないでせう。

お約束の鶏卵が近く入手いたしますから、そして早生温州が出初めしましたから、それを持つて近日もう一度お邪魔いたし度く思つて居ります。今度は早朝の列車で立ち行き、おひるをそちらでおよばれし、午後の列車で帰興します。お留守でしたらお宿へ托して来ます。釣をしてゐるとこの浜から見える明星岳の姿が、遠近の差こそあれ、宮の下のホテルの窓から見ると同じに見えるのも奇縁です。廣胖至つて元氣、この頃では早くも相当な悪童ぶりです。いも、あめ、だんご、も、食べ物の名は何でも一度で覚えこみます。食味が氣に入ると足を揚げ手を振り声を立て、躍り出すところなぞ、確に祖父に全田月先生を持つだけのことはあるとうなづけれます。全田月先生といへば、この急な冷気では銀山平の湯治場にもさう何時までも居るわけにも行けません。近く来興されること、楽しみにして待つてゐます。では近日お目にかゝります。どうぞそれまでお元氣で。

九月廿七日

堀口生

清寂庵様

梧右

〈受〉 神奈川県箱根宮ノ下

富士屋ホテル

長谷川巳之吉宛
〈発〉九月廿七日

静岡県興津八一六
堀口大學

〈註〉縦一七・四×横一〇五・六センチメートルの和紙に墨書。封筒は、差出人住所・氏名が朱印、三銭切手一枚貼付、消印は場所不明「19. 9. 27」。堀口大學は、一九四一(昭和十六)年十月より静岡県興津に疎開していた。

「岩子」は大學の異母妹で、軽井沢に疎開していた。

「廣^{こう}胖」は、前年二月十七日に生まれた大學の長男。

「全田月先生」は、大學の父・九萬一のことか。九萬一は、一九二五(大正十四年)まで一等一級外交官で、随筆家、漢詩人で「長城」は号。

堀口大學 長谷川巳之吉宛書簡
一九四四(昭和十九)年十一月二十九日

まだ山ぐらしですか。此頃のやうに雨ばかり多くては寒くてお困りでせう。お大事に。

B29 毎日のやうに頭上に飛来しますが、まだ大したもののは当地には落しません。但し二十七日には音だけズシーンときこへました。海中へ落したものの、由。廣胖のサインが鳴り出すと頭巾をかぶりタイヒくと言ひながら抱きついて来ます。壕が好きで一度入ると仲々出て来ず、これに閉口します。その後も腹具合よく大分肥て来ました。軽井沢の牛飼ひ娘は、大きな牝牛を一頭死なして

青くなつてゐます。お産が重く、肥立たず昇天したものの、由です。

昔から侍の商法とはよく言つたものです。ドイツが難儀してゐる様子心配です。

長城老父はサインの音も耳に入らず、悠々自適。空襲も爆弾もてんで問題にされず、警防団の手前小生が困ること度々。これも孝養の一つと存じ、御自由に願つて居ります。十一月廿九日

堀口老生

長谷川大兄

〈受〉神奈川県箱根宮ノ下

富士屋ホテル

長谷川巳之吉様

〈発〉十一月廿九日

静岡県興津八一六

堀口大學

〈註〉縦二三・二×横一二・二センチメートルの和紙便箋二枚に墨書。封筒は、差出人住所・氏名が朱印、七銭切手一枚貼付、消印は場所、日付不明「19. 11. □」。

この十一月より大學の父も疎開し、興津で同居していた。

堀口大學 長谷川巳之吉宛書簡
一九四五(昭和二十)年三月六日

拝呈。先日は当方の無様なお願ひにも不拘^まず早速御承引をたまはり感謝に堪えません。お手許御多端の折からとりわけかたじけなく有難さが身にします。番町書房から「桂離宮」を届けて呉れま

した。お指図によるもの、由。早速拝見。その美しさに酣酔この二三日は現実の世相を忘れ心楽しく羽化登仙の思ひで暮らしました。厚く御礼申し上げます。そこに起居し会同した古昔の人々の在りやうを想見するといふより、そこに起臥する自分がしきりに想ひに浮ぶのはこの高貴な別野の親しみ易いさびの性格から来るのでせうか。僕は或る時は貴兄と月見台の夜露に濡れて立ち、また或る時は青柳君と卍亭の腰掛けに坐して語りました。

僕が身近に置いて愛し度いと一番切に思つたのはあの船着場の小さな石燈籠でした。この本他に御予定がおりでなかつたら青々先生に廻してあげたいと思ひます。如何でせうか。祈安。

長谷川大兄 三月六日 沙上居にて

堀口大學

〈受〉神奈川県下足柄郡箱根宮ノ下

富士屋ホテル

長谷川巳之吉様

平安

〈発〉静岡県興津八一六

堀口大學

〈註〉縦二三・二×横一二・二センチメートルの和紙便箋一枚に墨書。封筒は、差出人住所・氏名が朱印、七銭切手一枚貼付、消印は「静岡県興津20. 3. 7」。

「桂離宮」は、藤島亥治郎の一九四五(昭和二十)年一月に番町書房より刊行された桂離宮の研究書。

「青柳君」「青々先生」は、青柳瑞穂のことか。

(翻刻者 学芸課 中野和子)

館 の 日 誌

- 6・11(土) 書庫見学
 6・12(日) 第二回読書会
 6・17(金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「村岡花子」(～7・6)
 6・18(土) 年間文学講座Ⅰ「亡霊を鎮める日蓮—遠妙寺と石和の鶺鴒」
 講師 長谷川千秋(山梨大学准教授)
 6・19(日) 名作映画鑑賞会「真昼の暗黒」
 6・24(金) 石和中学校出前授業(ミニ短歌甲子園)
 6・25(土) 文学創作教室「初心者短歌教室」第3回
 講師 三枝浩樹(歌人)
 6・28(火) 増穂中学校出前授業(与謝野晶子と山梨)
 7・2(土) 年間文学講座Ⅰ「信玄公誕生のはなし—大泉寺縁起」
 講師 長谷川千秋(山梨大学准教授)
 7・9(土) 特設展「宮沢賢治 保阪嘉内への手紙」
 閲覧室資料紹介「宮沢賢治 童話の世界」(ともに～8・28)
 7・10(日) 渡辺えり講演会「宮沢賢治と保阪嘉内」
 講師 渡辺えり(女優・劇作家・演出家)
 7・12(火) 学芸員実習受け入れ(～7・17)
 7・14(木) 教師のための学習会
 7・16(土) 朗読公演会「物語る演劇 山崎方代」(劇団黒テント)
 7・18(月・祝) 夏休み自由研究プロジェクト参加(宮沢賢治のメモパッドを作ろう)
 茶室「素心菴」にて呈茶
 7・23(土)・24(日) 与謝野晶子短歌文学賞表彰式
 7・26(火) 教師のための学習会
 ジュニアインターンシップ受け入れ(～7・28)
 7・27(水) 総合教育センター外部共催研修「文学館の魅力活用～能楽を知ろう」
 夏休みワークショップ「能の世界を体験しよう」
 講師 佐久間二郎(観世流能楽師)
 名作映画鑑賞会「銀河鉄道の夜」
 7・30(土)
 7・31(日) 夏休み子どもワークショップ「ペーパークイリングで銀河鉄道の写真立てをつくろう」
 講師 佐々木綾子(ペーパークイリング作家)
 8・4(木) 年間文学講座Ⅲ「宮沢賢治 保阪嘉内への手紙を読む」
 講師 中野和子(当館学芸員)
 8・6(土) 名作映画鑑賞会「鉄腕アトム」「緑の猫」
 8・7(日) 夏休みワークショップ「『やまなし』の森の飛び出す絵本を作ろう」
 講師 松下寛子(豆本作家・イラストレーター)
 第三回読書会
 8・10(水) 峡南地区学校図書館教育研究会出前授業(与謝野晶子と山梨)
 8・18(木) 年間文学講座Ⅱ「修羅を生きるマタギ(猟師)—「なめとこ山の熊」」
 講師 牛山恵(都留文科大学名誉教授)
 8・27(土) 年間文学講座Ⅰ「寺社縁起と伝説」
 講師 長谷川千秋(山梨大学准教授)
 8・28(日) 特設展関連「移動プラネタリウムによる『二人の銀河鉄道～賢治と嘉内』」
 お話 高橋真理子(星空工房アルリシャ)
 9・8(木) 文学創作教室「三枝昂之短歌講座」
 講師 三枝昂之(当館館長)
 9・9(金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「辻邦生」(～9・28)

利用のご案内

■開館時間

- 展示室 9:00～17:00(入室は16:30まで)
 ○閲覧室・研究室 9:00～19:00(土・日・祝日は18:00まで)
 ○講堂・研修室 9:00～21:00
 ○茶室 9:00～21:00(準備・片付けの時間も含まれます)
 ○ミュージアムショップ 9:30～16:20

■休館日(9月～3月)

- 9月5・12・20・26日
 ○10月3・11・17・24・31日
 ○11月7・14・24・28日
 ○12月5・12・19・26～31日
 ○1月10～17・23・30日
 ○2月6・13・20・27日
 ○3月6・13・21・27日
 ○年末年始は、12月27日(火)～1月1日(日)まで休館します。また、1月11日(水)～1月17日(月)は館内くん蒸等のため休館します。

■施設利用のお申込について

- 講堂・研修室・研究室・茶室の申込みは、使用しようとする日の6ヶ月前から原則として10日前までです。
 ☆いずれも休館日は受け付けません。使用上の注意は申込みの際、ご説明いたします。

■展示室観覧料

	常設展			企画展		常設展と企画展のセット券
	個人	団体 (20名以上)	美術館との 共通券	個人	団体	
一般	320円	250円	670円	600円	480円	730円
大学生	210円	170円	340円	400円	320円	490円

※65歳以上の方(企画展は県内在住者のみ)、障害者及び介護者、並びに小・中・高・特別支援学校生の観覧料は無料です。

山梨県立文学館 館報 第100号

平成28年9月10日発行

編集兼
発行人 三枝昂之

発行所 山梨県立文学館

〒400-0065

山梨県甲府市貫川一丁目5-35

☎055(235)8080 FAX 055(226)9032

<http://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/>

※紙面の無断転載はお断りします。